

# どんな子供でも人間として — 沢田美喜 GIベビーの母 —

(株)日本設備工業新聞社  
代表取締役社長 高倉克也

占領下の日本で米軍兵士とのあいだに生まれた子供たちの多くが見棄てられた。両親だけではなくGHQ(連合軍最高司令官総司令部)と日本政府も戦後社会の恥部として黙殺する。

だが沢田美喜(1901-1980)は見過ごすことができなかつた。外交官の妻として世界をめぐり、児童養護施設のボランティアをしたこともあった。GIベビーと呼ばれた混血孤児に何の罪もない。

新たな救済施設の開設を決心したもの、道のりは険しかった。三菱財閥の創業者・岩崎弥太郎の孫娘である美喜も戦後の財閥解体で資金繰りに奔走する。GHQと日本政府に疎まれ、世間の風は冷たかつた。あらゆる偏見、侮蔑、憎悪のなかで敵国の兵隊の子を育てる非国民と罵声を浴びた。

## ここで心の眼が開かれた

美喜は三菱財閥の3代目総帥・岩崎久弥と保科子爵家の妻・寧子の長女として現在の東京都文京区本郷で生まれた。3人の兄がいたものの、幼い頃から男まさりで両親の手を焼かせ、父は「この子が男であつたら」としばしば洩らしたという。

東京女子高等師範学校附属高等女学校(お茶の水女子大学附属高校)に進学し、「汝の敵を愛せ」と説くキリスト教に惹かれていく。しかし真言宗に熱心な祖母の意向で中退し、津田塾大学の創設者である津田梅子を家庭教師に英語などを学ぶ。

21歳でクリスチャンの外交官、のちに初代国連

大使となる沢田廉三と周囲の反対を押し切って結婚する。アルゼンチン、中国、イギリス、フランス、アメリカなどを転任し、三男一女に恵まれた。次男の久雄は声楽家となり、歌手の由紀さおりの姉である声楽家・安田祥子の夫となる。



沢田美喜

フランス滞在中はパリ社交界の人気者となり、歌手のジョセフィン・ベーカーと親交を深めた。絵画にも興味を持ち画家のマリー・ローランサンに弟子入りする。後年ジョセフィンは美喜の良き理解者として活動を支援していく。ニューヨークでは作家のパール・バックと出会い友人となる。

ロンドンでは孤児院ドクター・バーナードス・ホームを訪問し、子供たちが明るい表情で暮らしていることに驚愕した。付属の学校が設けられ、職業訓練も行われている。深い感銘を受け、定期的にボランティアとして働くことにした。のちに美喜は「ここで心の眼が開かれた」と語っている。

帰国後の1941年、連合軍との太平洋戦争が勃発する。戦況は毎日に悪化し、3人の息子たちも召集された。敗戦の年の1945年1月、海軍にいた三男の晃がインドシナ沖で戦死する。

第2次世界大戦終結後、無条件降伏した日本は

マッカーサーの率いるGHQの占領下に置かれた。岩崎邸の本館もGHQの情報部に接收される。米軍兵士による女性暴行事件が頻発し、街娼が出産した混血児は街中に放置された。孤児になったGIベビーは約5000人に達したと伝えられている。

## エリザベス・サンダース・ホーム

食料の調達などで列車に乗り込んだ1947年の冬、美喜は混血児の母親と間違われる事件に遭遇する。闇物資を摘発するために見回っていた警官から美喜の真上の網棚に置かれた細長い風呂敷包みを開くように命じられた。身に覚えがなかったものの、言われるままに風呂敷を開くと新聞紙にくるまれた混血の赤ん坊の死体が出てきた。警官がきびしく問い詰めると同乗客の証言で美喜への疑いは晴れた。そのとき彼女はGIベビーの母として生涯を捧げることを心に誓ったという。

夫も理解を示し、美喜は実家の父に自分の計画を打ち明けた。神奈川県大磯にある岩崎家の別荘を施設として使わせてほしいと申し入れる。父は眼に涙を溜めて「世が世なら大磯の家ぐらい寄付してやるのだが」と絶句した。すでに大磯の別荘はGHQの命令で日本政府のものになっていた。

別荘を取り戻すために美喜はGHQとの直談判を開始する。日参して粘り強く交渉し、ようやく買い戻すことで合意した。とはいえ現状では手の届かない金額で私財を売り払って工面する。彼女に共感した友人たちは時計、貴金属、家具、衣類、美術品などを高く買い取った。海外の友人たちにも呼びかけて広く募金活動を行う。

初の寄付金は東京で生涯を終えたイギリスの婦人エリザベス・サンダースから贈られた。彼女は貯金を日本の福祉事業に寄付したいという遺言を残していた。感激した美喜は聖路加国際病院で開いた設立発起人会で施設の名称をエリザベス・サンダース・ホームにすることを提案する。

悲願のエリザベス・サンダース・ホームは1948年2月に発足した。受け入れた孤児たちは11月までに30人を越えた。ミルクとオムツが次々になくなっていく。美喜は米軍キャンプを精力的にまわり、速やかな支援を訴えた。ところが反応はきわめて鈍かった。米軍にとって混血孤児の問題

はできるだけ隠蔽したいというのが本音だった。激怒した美喜は「あなたたちが生ませた子ではないか。協力するのはあたりまえだ」と詰め寄った。彼女の迫力に将校も兵士も圧倒されたという。

## 色は自分で塗り変えられる

米軍だけではなく世間の風あたりも強かった。敵国の子を育てるのかとホームに怒鳴り込む輩もいた。疲れ果てた美喜を支えたのは赤ん坊たちの安らかな寝顔だった。「どんな子供でも人間として生を受けた以上、立派に育っていかなければなりません」とみずから奮い立たせた。

ホームへの寄付金を募るためにたびたび渡米するようになる。ニューヨークで出会い意気投合した女優グレース・ケリーはモノコ公妃になったあとも美喜たちの活動を支援した。

子供たちが学齢期を迎えた1953年、戦死した晃の洗礼名を冠した学校法人聖ステパノ学園小学校を創設する。当時、混血孤児を迎える小学校はどこにもなかった。6年後、中学校も開校する。

アメリカでは混血孤児の新たな養子縁組制度をつくろうと積極的に働きかけ、ついに法改正にこぎつけた。さらに卒園生が新天地で自立できるようにブラジルの広大なアマゾン川流域の開拓に着手し、聖ステパノ農場を建設する。

晩年の美喜は世界各国の卒園生たちの家庭を訪ねることを何よりも楽しみにしていた。ホームで育った子供たちは約2000人にのぼった。このうち約500人が海を渡り、家族をつくり、新しい生活を送っていた。美喜は「人生は、自分の手で、どんな色にでも塗り変えられる」と励ました。

家族のすすめで地中海にあるスペインの風光明媚なリゾート地・マヨルカ島の観光旅行を行うことにした。ところが現地で急激に体調が悪化し、心臓発作によって78歳で急逝する。

生前の美喜は決してやさしいだけの聖母ではなかった。聞き分けのない子供には怒りをあらわにして叱責した。それでも母として慕われたのは彼女の愛が本物であることに気づいていたからだろう。美喜に叱られた子供ほど彼女の死を嘆き、悲しみ、感謝の言葉を口にした。「本気で怒るのはほんとうの親だけじゃないですか」と。